名所物見の旅　其の伍拾壱　水平歩道を行く

文・写真：河辺雄二、CFAY広報課

阿曾原温泉での一夜は快晴で明けた。夜明け前に出発した人もいたようで、五時過ぎに目が覚めた時は、大部屋の中のいくつかの布団はすでに蛻の殻であった。欅平駅まで下山して祖母谷（ばばだに）温泉へ足を延ばす予定の私はそれほど慌てる必要もないが、旧日電歩道で“下ノ廊下”方面に向かう人たちは、黒部ダムまで距離があるので早立ちするに越したことはないだろう。

朝6時20分、私は深山幽谷の冷気漂う阿曾原を発ち、欅平に向けて水平歩道へと歩きだした。

水平歩道のハイライト“大太鼓”の桟道。対岸には黒部川の深い谷底から千メートルに及ぶ奥鐘山の岩壁が聳え、迫力ある風景が展開されている。

黒部川の歴史と電力開発資材運搬用の歩道

黒部川は戦国時代の富山城主・佐々成政（さっさなりまさ）の厳冬期におけるザラ峠～黒部川“平の渡し”～針ノ木峠越えにはじまり、江戸時代の加賀藩による森林管理としての奥山廻り、明治に入ってからの鉱山開発、そしてその急流を利用しての電力開発という歴史を歩んできた。

黒部川の電力開発に最初に着目したのはタカジアスターゼ発明やアドレナリン抽出で知られる高峰譲吉博士で、アルミニウム地金の生産に必要な電力を得るために大正6年黒部川黒薙付近を探らせ、翌8年には東洋アルミナム㈱を設立して本格的に電力開発に乗り出した。それまで黒部流域には鐘釣温泉から欅平経由で祖母谷温泉を結ぶ湯治や登山用の岨道があるばかりであったが、電力開発のための資材運搬用の歩道が作られはじめる。まず大正8年夏、古川合名会社が祖母谷温泉から黒部川右岸の後立山（うしろたてやま）連峰の尾根筋に棒小屋沢までの道を拓く。大正9年には東洋アルミナムが欅平から黒部川左岸に、阿曾原、仙人谷へと歩道を延ばしていった。また東新電気によって、“平ノ渡し”から上流部の“上ノ廊下”を通り薬師沢出会い付近まで、下流部は“中ノ廊下”（現・黒部ダム湖）から棒小屋沢までの東新歩道が拓かれた。東洋アルミナムから経営を引き継いだ日本電力が大正14年に仙人谷から上流へと掘削を開始。昭和4年上流方面からの道と繋がり、黒部川周辺には各社の歩道が複雑に絡みあった。

現在、歩道は東洋アルミナムによって拓かれた欅平から阿曾原までの水平歩道と日本電力によって拓かれた仙人谷から黒部ダムまでの旧日電歩道が残るのみで、他の黒部開発古道は廃道となり、微かにその痕跡を残すだけである。

岩壁に掘削された水平歩道から眼下百数十メートルの黒部川を覗き込む登山者たち。

迫力満点の水平歩道

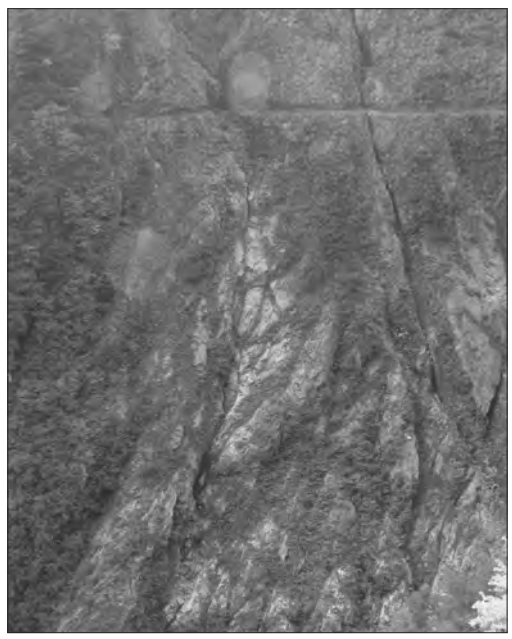
黒部峡谷の歩道は場所によっては川床から100メートル以上の切り立った岩壁に穿たれたスリルある岨道で、岩盤が削れない所は桟道や吊り橋を架けて通行した。当初幅員は50センチほどしかなく、切り出した丸太を渡しただけの場所もあって歩荷（ボッカ）の転落事故が跡を絶たなかった。賃金は一貫あたりの重さによって支払われ、平均一人13貫（50キロ弱）、中には40貫（150キロ）を担ぐ者もいたという。当時の映像を見ると、大きな荷物や材木を担いだ歩荷たちが桟道を歩く様子はまるで曲芸のようで、私は「三国志」に登場する“蜀の桟道”を連想した。現在は関西電力によって毎年整備されているので山慣れた人なら通行に何の不安もないが、誤って落ちればまず助かる可能性はない。

阿曾原温泉を出発するとすぐに急登と急降下を繰り返し、水平歩道とは名ばかりでなんだか騙されたような気になるが、40分ほどで道はやっと水平になる。山襞の中腹に穿たれた道は、欅平に向かって同じコンターを保ちながら遥か先まで延々と続いている。水平歩道に懸かる折尾谷と志合谷の大きな谷は、内部トンネルで通過する。志合谷のトンネルは長さ約150m、内部は真っ暗闇なので懐中電灯は必携だ。初夏にはまだトンネルの入口が雪で閉ざされているので、その場合は黒部川まで一直線の滑り台になっている危険極まりない雪渓をトラバースしなければならない。

水平歩道のハイライトは大太鼓と呼ばれる区間で、黒部川対岸に迫る奥鐘山の千メートルに及ぶ大岩壁を眺めながら、絶壁上に丸太を組んだ桟道を歩くのは恐いというより感動的な迫力がある。黒部峡谷は理科の教科書に出てくるような典型的なV字峡を見せ、これほどスケールの大きな峡谷は日本中どこを探しても他にはない。

志合谷で起きた恐怖の泡（ホウ）雪崩

黒部第三ダム関連工事も山場にさしかかっていた昭和13（1938）年12月27日午前3時半、志合谷にあった越冬作業員の宿舎を雪崩が襲い、就寝中の工夫102名のうち死者行方不明者84名を出す大惨事となった。志合谷宿舎は雪崩を考慮して危険のないと思われた場所に建てられ、四階建ての宿舎の基礎と1～2階部分は分厚いコンクリート、上部は合掌造りで、厳冬期においても安全な筈であった。死者行方不明者の内、雪の下敷きとなった37名はすぐに発見されたが、他の捜索は厳冬の黒部では困難を極め翌春まで持ち越された。



水平歩道は黒部峡谷の岩壁に一直線に道が拓かれている。

この出来事の本当の恐ろしさが分かるのは、春になって再開された捜索によってであった。雪崩事故の遺体や遺留品は雪崩に埋もれた建物跡の下ではなく、黒部川を挟んだ対岸の奥鐘山岩壁まで600メートルにも渡り散乱し、中には尾根を越え想像もつかないような場所からも発見された。まるで爆発でもあったような惨状に、黒三ダム建設の工事従事者たちは恐怖のどん底に陥れられたという。翌々年の昭和15年1月8日未明には阿曾原のブナ林の中の宿舎が襲われ、地震のような衝撃により火災が発生し死者26名を出した。数百メートルにわたってブナ林はなぎ倒され、叩き潰された宿舎の上にブナが何本も突き刺さっていた。越中では昔からこのような雪崩のことを泡（ほう）と呼んで恐れてきたが、その正体は長い間謎であった。

近年大学などの研究によりそのメカニズムは徐々に解明され、志合谷や阿曾原で起きた雪崩の正体は大規模な乾雪表層雪崩ということが分かってきた。低温で乾燥したままの新雪が広範囲にわたって滑り落ちると、中の空気が圧縮されとてつもない破壊力を生むのである。先端部のスピードは時速250キロと新幹線並みで、爆風を伴うのが最大の特徴といえる。ふつう雪崩は雪の圧力で押しつぶすのであるが、乾雪表層雪崩は大爆発を起こしたような衝撃波ですべてを吹き飛ばし、時には斜面を這い上がって尾根を越えたりする。

江戸時代後期の天保年間に書かれた鈴木牧之の「北越雪譜」には“ほふら”として登場し、そこには「雪崩に似て非なるもの」と定義されている。雪崩の危険はないと考えられていたところでも、数十年に一度というような乾雪表層雪崩が襲えば、頑丈な建物でさえ一瞬にして破壊され尽くすのである。黒部など北アルプス一帯は低温・乾雪・急斜面などいくつも乾雪表層雪崩が起きやすい条件を備えており、雪と斜面がある限り安全な場所はないのかもしれない。

喧騒の欅平に到着

阿曾原温泉から約６時間、水平歩道歩きもいささかうんざりしてきた頃、道は急降下してやっと欅平駅に到着。黒部峡谷鉄道トロッコ電車の終点欅平は、色とりどりのファッションに身を包んだ華やかな観光客で溢れていた。七日間の山旅で衣服もザックもドロに汚れた私は身の置き所がない場違いな世界にほっぽり出されたようで、いささか白けた気分にさせられた。深山の余韻が消えないうちにと、私の足は今日の泊まり場祖母谷温泉への道を急ぐのだった。

大正時代に撮影された黒部の桟道。こうした写真を見ると、私はこの時代の黒部峡谷に足を踏み入れてみたかったと思うのである。